

令和4年度 静岡県立沼津西高等学校 「探求と表現」 報告書

1 <年間の取組報告>

(1) 連絡協議会による沼津城北高校との連携

・連絡協議会を2回実施。

第1回連絡協議会（8月）：今年度の取り組みについて

共同研究としての工夫やすり合わせ、来年度合同発表会を実施へ向けての検討を行った。

第2回連絡協議会（2月）：今年度の報告と来年度の実施計画案について

合同発表会計画案の大筋を作成した。

(2) 「探求と表現検討委員会」

・週時程に設定した定期打合せでの指導案の立案、検討、調整、報告等を行った。

・先進校への視察を行い、取り組み方や指導計画、生徒の成果物等、見学や情報収集を行った。合わせてセンター実施の研修に参加し、指導の充実へ向けて校内にフィードバックした。

訪問校：掛川西高校 静岡東高校 静岡西高校

(3) コーディネーターの活用

年間指導計画や個別の指導案件に対する助言、指導担当講師への事前連絡調整、生徒の班別テーマや発表内容に関する直接的なアドバイス等を行っていただいた。

(4) 探究スキルを高める・プレゼンテーション能力を高める

1年次をスキル・能力の基礎的部分の定着期、2年次を応用的部分の伸長・発展期にとらえ、1年生は本校にて従来より取り組んできた「沼津活性化プロジェクト」にクラス単位で班を構成し取り組み、2年生は学年を単位に、テーマごとにグループを構成し、各グループで計画・立案し、探究活動に取り組んだ。両学年ともに、①グループ・班ごとのテーマ設定 ②テーマについて情報収集等 ③調査活動（校外でのフィールドワークを含む） ④中間発表 ⑤コーディネーター、アドバイザーからの助言 ⑥クラス発表会 ⑦学年発表会 の流れで思考を深めた。

(5) 進路指導の充実

探究活動を通して自己表現力やコミュニケーション力を高めることができた生徒が多かった。

<生徒の振り返り>

- ・調べる力とプレゼン力がついた。 ・自分の意見を言える力が少しはついたと思う。
- ・普段自分ではやろうと思わないことに対して探究心がわくようになった。
- ・様々な人の声を聞き、より具体的な提案ができるようにしたい。

2 <特徴的な取組>

「生徒設定による探究活動を支援するカリキュラム研究」というテーマに対し、本年度は1年次の基礎から2年次の発展への伸長を構成できることに主眼を置き、指導方法や体制づくりに工夫を加えた。

- ・班設定 1年次：クラス内におおまかに提示し選択
2年次：興味・関心分野の重なる者同士で学年を単位として構成
- ・テーマ設定 1年次：沼津活性化プロジェクト（本校にて従来より総合探究として実施）の枠から
2年次：班ごとの大枠から具体化し設定
- ・調査活動 1年次：学年が設定した期日に一斉に行う（10/7）
（フィールドワーク） 2年次：夏季休業中を期間とし、各班が自分たちで訪問先を設定し、アプ取りを実施。
内容も取材、イベント参加、メールやアンケート等、多岐にわたった。
- ・学年発表会 1年次：1年生のみで実施
2年次：2年生に加え、1年生が聴衆として参加



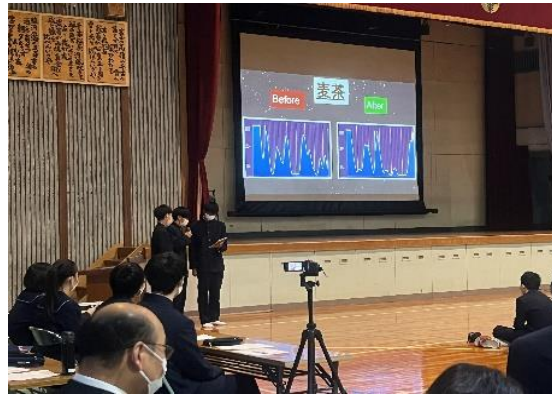
学年発表会



テーマ別研修



KJ法体験



学年発表会

3 <成果と課題>

(1) 普通科の魅力向上の実現

本校では西高GP（グラデュエーション・ポリシー）として8つの育てたい資質・能力を設定している。この中でも、特に協働力、分析力、思考力、発信力について、探究活動により身につけさせていく意義を職員間での共有することができた。教科・科目の面での特徴を打ち出しにくい普通科であるからこそ、目指す学校像や育てたい資質・能力を職員が明確に意識し、カリキュラムに示されたそれぞれ活動が何を求め、どんな力を伸ばすことができるのかを継続的に検討しつつ、指導体制や手法を錬成していく必要がある。

(2) 「目指す学校像」に向けての進捗

研究指定の2年が経過し、生徒の成長や指導体制・手法の発展について、定点観測的な振り返りを行うことができた。1年次を基礎としての2年次の発展という流れに関し、おおむね順調に進化、発展させることができています。一方で、計画、立案する主担当、生徒を直接指導する役割（主に担任等）、側面から支える役割（主に副担任等）等、果たす立場ごとの負担や労力の差は小さくはない。有効に運用できるカリキュラムの研究、構築という側面からは、さらにシステムとしての構築、洗練を検討していく必要がある。

(3) 生徒の資質・能力の成長

全体の活動を通して、前向きに自主的に取り組む生徒が多く見受けられた。特に2年目となる2年生においては発表の質や姿勢等も向上し、分析力や発信力についての成長がうかがえた。自ら外の世界と関わろうとする行動力についても伸長が見られた。今後の課題として、生徒相互の評価について、印象や表面的な出来栄えに流される傾向も感じられ、自己評価と総合評価の関連等、次年度へ向けて、継続的に研究していく必要がある。

(4) 地域に開かれた教育課程の実現

探究活動において地域に関わり、理解し、貢献する面では指導体制や具体的なプログラムについても次第に確立され、活性化されつつある。生徒会や部活動単位での活動でも一定の関りや相互の理解ができています。加えて本校個別の成果指標である「将来地元で地域貢献したいと考える生徒の割合」も「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」を合わせて本年度は50%を超えた。この指標の背景には様々な要因が考えられるため、一概には言えないが、おおむね順調に進んでいると考えられる。この背景の分析とともに、内容の精査や関わり方の充実等について、継続的な検討が必要である。